閉ざされた森の神話

一　戸沢家の人々と一匹と一羽

亜夢（あゆめ）は七才の女の子だ。元気なおばあちゃんとトマトを作っているおじいちゃんと住んでいる。おじいちゃんはトマト作りの名人だ。温室栽培ではなくて、太陽の光が十分にあたる自然な土で作る。土を耕し肥料混ぜて元気な土を作る。それで初めて立派なトマトができるんだ。あなたも温室で育てられるより、自然の中でのびのび育った方が楽しいだろう。

おじいちゃんは一個千円もするトマトを作る。そのために千の手間をかける。

父母は三年前に離婚した。亜夢は三人で暮らしたことをほとんど覚えていない。一月（ひとつき）に一回三人一緒にご飯を食べる。とても仲良しに見える父母がどうして別れたのだろうと亜夢は不思議に思う。

「亜夢ちゃん、学校に行こう」

と烏のカーが土塀の上で鳴くと、続いて

「亜夢ちゃん、学校に行こう」

と良太（りょうた）の声がする。カーは良太の言葉を覚えてしまったのだ。

穏やかな秋の日の朝。猫のタマは日向で丸くなっている。タマは不思議な猫だ。明日を夢で見ることが出来るのだ。昨日、鯵の骨を食べている夢を見た。今朝、おばあさんが鯵の骨をくれた。だけど、タマが明日を夢で見ることが出来るなんて誰も知らない。

烏のカーがタマの横で遊んでいる。タマとカーは仲良しだ。時々、熟した木の実を運んできたりしてくれる。

二　森に行ってはいけない。

家の近くに小さな森がある。良太と亜夢は森のまわりをぐるーと回って学校へ行く。

森の道をまっすぐに行けば、近道なのにと亜夢は思う。でも、おじいちゃんとおばあちゃんから、森へ行ってはいけないときつく言われている。

「なぜ？」

と、亜夢が聞くと、おじいちゃんは「言い伝えだから」。おばあちゃんは

「女の子が神隠しにあったんだよ」

と、言った。

「神隠しって？」

亜夢がきいた。

「森に入ったきり帰ってこなかったんだよ」

おばあちゃんが言った。

「十年が過ぎて帰ってきた」

おじいちゃんが口を挟んだ。

「神隠しにあった時と少しも変わっていなかった。着ていた服も、年も七つのままだった」

おばあちゃんは言った。

「言い伝えだよ」
おじいちゃんはお酒を飲みながら言った。
不思議なことに亜夢には森が少しも怖くなかった。その子は十年もどこに行っていたのだろう。その方が興味があった。

昨夜は森のことを色々と考えてよく眠れなかった。だから、今朝は寝坊をしてしまった。おじいちゃんは畑に出かけ、おばあちゃんは亜夢のご飯を用意すると、庭の落ち葉を掃除していた。

「あっ」
おばあちゃんは声を上げた。亜夢が飛び出してくるのと同時だった。
「亜夢、良太君は今日は風邪でお休みだって」
亜夢は食パンをくわえたままうなづいた。
「やれ、やれ」
おばあさんは庭箒に顎を乗せて亜夢の後ろ姿を見送った。

道には学校へ行く友達の姿はない。
遅刻……。今まで一度も遅刻したことがないのに。亜夢は半泣きになった。その時目の前に森の道が飛び込んできた。亜夢は吸い込まれるように森に入った。

森の道には何も変わった物はなかった。少し落ち葉が多いかなあと亜夢は思った。森は静まりかえっていた。鳥の声も羽ばたきも聞こえない。目の前に白いものが落ちてきた。雪だ。冬はまだまだなのに。

「亜夢ちゃん」

後ろから声をかけられた。振り向くと良太がいた。良太の足下にタマがいる。

「亜夢ちゃん」

声がする方を見ると、枝にカラスのカーがいる。

「どうしたの良太君。風邪でお休みじゃなかったの？」

「それは亜夢ちゃんじゃないの」

「私は風邪をひいていないわ」
「そうか、よく分からないけど、それじゃよかった」
「雪が降ってきたね」
「雪じゃないよ。だって冷たくないもん。寒がりのタマも元気だよ」
「ここは寒くないからよ」
タマが喋った。タマが喋った……。
「おはよう」
足下で声がした。二人が下を見ると、小さな紫色の花が咲いていた。見たこともない花だった。
「花も喋った」
良太が叫んだ。
「おはよう」
亜夢はつくばうって花に声をかけた。みんな喋るんだ。
「この森では動物も喋るんだよ。動物だけじゃない。花や木もね。風や光もね。すごく無口だけれど。君たちは森を出ると森で

の出来事はみんな忘れてしまう」
頭の上から声がした。
「忘れてしまうというのは正しくないなあ。森では違う時間が流れているんだ。うーん……」
見上げると、大きな木が枝を手のようにして腕組みをして考えていた。後に続く言葉を待っていたけれど木は黙ってしまった。仕方なく、二人と一匹と一羽は森の道を歩き始めた。
「それも正しくないなあ」
後ろで木の声がした。振り返ったけれどその後の言葉はなかった。
しばらく行くと良太が言った。
「遅刻にならなかった。よかったね」
「遅刻にならなかった。よかったね」
カラスのカーが言った。
「カーも自分の言葉を喋りなさい」
と、亜夢が言った
「おなかがすいたよ」

カーはそう言って飛んで行ってしまった。
歩いていく方向には明るい光があふれていて、学校に向かう生徒の姿が見えた。

三　少し違う

授業はいつもと変わりなく始まった。
「みんなおはよう」
後藤先生が教室に入ってきた。
「おはようございます」
と、生徒が声をそろえる。後藤先生は「起立、礼」をやらない。みんなの笑顔があれば十分よと言う。
後藤先生はきれいと思う。亜夢も後藤先生のような大人になりたい。先生になって、子供たちを教える。この前は、大人になったらなりたい事に「ケーキ屋」って書いたけれど、次は「先生」にしよう。でも、後藤先生に「どうして？」って聞かれたら恥ずかしいかなあ。

「一時間目は図画の時間です」
「えっ」
思わず亜夢は声を上げた。
「一時間目は音楽のはず。クレヨンなんか持ってきてない」
亜夢以外の生徒はさっさとクレヨンを出している。
「どうしよう。クレヨン……。ランドセルを開けたって。えっ、あるわ、クレヨンが」
「亜夢ちゃん、花壇へ行こう」
仲良しの七海(ななみ)ちゃんが誘いに来た。
「私の勘違いだったんだ」
亜夢は胸を撫で降ろした。
亜夢は花壇の花を画かずに、フェンスの近くに咲いている黄色い花を画こうと思った。仲間はずれでかわいそうな気がしたからだった。
「オミナエシね」
振り向くと、後藤先生がいた。とてもい

い香りがした。
「秋の七草の一つよ。花言葉はやさしさ・純真」
「じゅんしん？」
「亜夢ちゃんみたいに素直な心よ。もう先生にはないなあ」
ふっと笑って、少し長めのため息をついた。
「頑張ってね」
亜夢の肩をぽーんと叩いて他の生徒の方に行ってしまった。
「亜夢ちゃん、摘んで家に持って帰ったら。雑草でしょ」
隣の七海ちゃんが言った。亜夢は強く首を横に振った。モンシロチョウが一番多く舞っているのは、花壇の花ではなくて、オミナエシの花だった。亜夢は花だけじゃなくモンシロチョウを一つ二つと描きこんでいた。
「かわいそうだよ」

オミナエシの葉っぱにとまっていたテントウムシが言った。

四　森に行けば一つ変わる

朝ご飯にいつもトマトが一つついている。トマトはとてもおいしい。毎日食べてもその日その日の味が新鮮だ。でも秋が深まると収穫は終わる。また春に備えての土作りが始まる。

昨日は森に入った瞬間は覚えているが、いつの間にか校門の前に良太君と立っていた。そして、テントウムシが喋った。亜夢だけに聞こえたのではない。七海ちゃんも、

「かわいそうかなあ」

と、首をかしげたのだった。でも、それはテントウ虫のことだろうか？　テントウムシが喋ったと亜夢が言うと、七海ちゃんは不思議そうな顔をして亜夢を見ていたから。

「おばあちゃん、テントウムシって喋るの？」
縫い物をしていたおばあちゃんは、ちょっと針を止めて、
「そりゃ、喋るよ」
と、言った。
「ただね、人には聞こえないだけだよ」
「私は聞いたよ」
「そうかね、亜夢にはテントウムシの声が聞こえるのかしら」
おばあちゃんは、楽しそうに笑った。

二人の横でタマが明日の夢を見ていた。森の道を歩いていく。良太や七海ちゃんもいる。カーもいる。楽しそうな声が聞こえてくる。遊園地だ。タマは行ったことがないけれど、亜夢の絵本で見たことがある。三人と一匹と一羽は回転木馬を見ていた。木馬に乗っているのは……。
「ニャーン」

突然目が醒めた。カラスのカーがタマの頭をくちばしでつついた。

五　森の番人

「亜夢ちゃん、遊ぼう」

七海ちゃんと良太の声がした。今日は日曜日だ。学校も好きだけれど、友達と遊ぶ日曜日も亜夢は好きだ。朝一番から畑に出ていたおじいちゃんが帰ってきた。

「おはよう」

「おはようございます」

三人が声をそろえた。

「みんなお利口さんだね」

おじいちゃんは取り立てのトマトを一個ずつ三人に渡した。渡す時に一人ずつの頭をなでた。

「ありがとう」

一人ずつお礼を言った。

森の道の前にさしかかると、森の方から、

「面白いぞ、面白いぞ」

と言う声が聞こえる。三人は声に誘われるように森に入った。七海ちゃんは六月に転校してきた。良太は共働きの父母でおじいちゃんやおばあちゃんはいない。森の言い伝えを知っているのは亜夢だけだった。だけど一人置いていかれるのはいやだ。

森の道にタマがいた。歩きながら、

「面白いよ、面白いよ」

と言っている。タマの背中にカラスのカーがいる。カーも

「面白いぞ、面白いぞ」

と言っている。

「森の遊園地に行こう」

タマが言った。

「不思議な森ね」

七海ちゃんが言った。

「面白そうだ」

良太が言った。その時、ガサッと音がした。

音の方向見ると、金色に輝く狐が三人を見ていた。そして、くるりと体を反転させた。太くてながーい尾っぽだ。カーが狐の背中に止まった。真っ黒なカーの羽根が金色に輝いた。金色狐は急に立ち止まり、亜夢の方に体を回転させた。

「ここからは遊園地への道だ。俺は森の番人だ。ただで通すわけにはいかない。無理に通るならくってしまうぞ」

狐の口が耳まで裂けた。三人とも悲鳴を上げた。亜夢はふるえる手でトマトを差し出した。

「ほお、トマトか」

狐がトマトを食べるだろうか？

「これは旨そうだ。みんな一つずつ置いて行きな。カラスと猫はおまけで通してやる。みんな遊園地を楽しみな」

六　今日は速めに木馬を回して

狐があけた道の奥から音楽が聞こえてきた。楽しい**行進曲**だ。太鼓の音や笛の音も聞こえる。

「メリーゴーランドだ！。私乗ったことがある」

七海ちゃんが言った。亜夢はなかった。忘れてしまったのかもしれないけれど。

「よく見ろよ」

いつの間にか金狐がそばにいた。

「乗っているのが誰か分かるかね」

亜夢には誰も木馬に乗っていないように見えた。

「よく見るんだよ。白い馬には風の子」

亜夢が白い木馬を見つめると、子供のりんかくがうっすらと見えた。

「見えた。風が吹いているね」

良太が言った。

「次は銀の馬だ。銀の馬には光の子が乗っている」

これはキラキラしていたから分かりやす

かった。
「赤い馬には水の子供だよ」
水の子供には小さな波が見えた。
「それぞれの森から遊びに来ているんだ」
「風の森、光の森、水の森、この森には他にも一杯森がある。闇の森、鏡の森、影の森。恐ろしい森もある」
「怖いわ」
三人は同時に言った。
「まあ、トマトを持ってくれば俺様が守ってやる。それはそうと木馬を回しているのは誰だと思う」
「機械でしょ」
亜夢が言った。
「馬だよ。森の外で死ぬまで働いて、死んだら食べられてしまった。肉は人間に食べられて、内臓は鳥や獣に食べられた。みんなの栄養になって、馬はこの森にやってきて馬神（うまかみ）になった」
「馬神（うまかみ）？」

「木馬を回しているのは馬神だよ。正確に言うと、それぞれの木馬が馬神なんだ」

「僕も乗りたい」

良太が言った。

「いいよ乗せてやる」

金狐の言葉と同時に木馬は止まった。

三人を乗せると木馬は静かに回り始めた。

「今日は速めに木馬を回して」

亜夢の前で声がした。風の子供か、光の子供か、水の子供か亜夢に分からなかった。

「今日は速めに木馬を回して」

また声がした。木馬ははやく回り始めた。本当の馬に乗っているみたいだった。木馬はいないなないて立ち上がる。みんな必死にたづなをつかんだ。

ざわざわざわざわ。うん、それは風の言葉。キラキラは光の言葉。みんな言葉があるんだよ。耳を澄ませば聞こえるよ。風の森。光の森。夢の森。水の森。

七　フレンチトースト

一月（ひとつき）に一回、亜夢は両親と会う。日曜日に動物園に行ったこともあるが、今はほとんどが食事だった。今日も夕方から食事だった。おばあさんが駅まで送ってくれた。

「帰りはお母さんが送ってくれるからね」

おばあちゃんは亜夢の頭をなでた。

都心へ行く電車は乗客もまばらだった。一人旅はドキドキする。亜夢は靴を脱いで暮れていく外の景色を眺めた。家の灯りが美しい。どんな人が住んでいるのだろう？

お母さんはいつもの改札口で待っていた。会うとすぐに亜夢の手を握った。亜夢の目線に腰を下ろして、

「元気？」

と聞いた。亜夢が頷くと、手を愛おしそうに自分のほおにあてた。お母さんは亜夢

に会うといつもそうする。二人は普通の親子のように雑沓の中を手をつないで歩いた。

ざわざわざわざわ。うん、それは風の言葉。キラキラは光の言葉。みんな言葉があるんだよ。耳を澄ませば聞こえるよ。風の森。光の森。夢の森。水の森。

「どうしたの？」

お母さんは聞いた。

「ううん、何にも」

亜夢は強くお母さんの手を握った。

レストランでお父さんが待っていた。

亜夢はジュースで大人はワインで乾杯した。その後、お母さんから、赤いマフラーをプレゼントされた。亜夢は首に巻いた。

「とてもよく似合うよ」

お父さんが拍手した。お父さんからのプレゼントはディズニーの絵本だった。

「ありがとう」
と、亜夢は言った。お父さんとお母さんはお互いの仕事の話を少しした。亜夢は学校のことを聞かれた。
「学校は慣れた」
「うん」
「いじめっ子はいないか」
「いない」
「勉強は楽しい？」
「楽しい」
料理が次々に運ばれてきた。亜夢はキッズメニュで量は少ないが、大人と同じものだった。最後に食パンが出てきた。
「どんなご馳走だって、このパン以上のものはない。日本人がお茶漬けやおにぎりが一番おいしいって思うように、フランス料理で最高はフレンチトースト」
お母さんもうなずいた。いつも料理の最後はとても甘いデザートだった。亜夢はフレンチトーストがあまり好きじゃない。少

しお父さんとお母さんは変わったと思う。
「森に行けば一つ変わる」
誰かが耳もとでささやいた。
ざわざわざわざわ。うん、それは風の言葉。キラキラは光の言葉。みんな言葉があるんだよ。耳を澄ませば聞こえるよ。風の森。光の森。夢の森。水の森。
お母さんが亜夢を家まで送ってくれた。
帰りの電車の中で亜夢は森のことを聞いた。
「お母さんが子供の頃も、森に行ってはいけないって、おじいちゃんやおばあちゃんに言われた？」
「森ね……」
お母さんは少し考えていた。
「忘れたわ」
と言った。
「テントウムシが喋った」

と、言おうと思ったが、亜夢は言葉を飲み込んだ。

八　風の子

おじいちゃんが、亜夢と同じくらいの年の男の子と帰ってきた。二人はカゴに入りきれないほどトマトを持っていた。

亜夢は前にその子を見たことがあるように思った。亜夢が近づいて行くと、ピューと風の音がした。

「トマトを取るのを手伝ってくれたんだよ」

おじいちゃんはその子の頭をなでながら言った。

「亜夢と同じ七才だ」

でも、こんな子は学校にいない。

「トマトを取るのは大人顔負けだ。丁度うまい具合に熟したトマトを上手に選びよる」

「亜夢、一緒に遊んだら」
隣で話を聞いていたおばあちゃんが言った。
「一時間ほど。時計を持ってお行き」
「いいよ、すぐに帰るから」
亜夢が言った。
男の子は恥ずかしそうに下を向いて歩いた。
「公園へ行く？」
男の子はうなずいた。歩きながら小石をけった。
「名前はなんていうの？」
「風太（ふうた）」
「風太くん」
「学校に行っていないの？」
「行っていない。学校なんかないもん。俺、森に住んでいるんだ」
「森に住んでいるって……」
「俺は風の子なんだ。木馬は楽しかっただろう」

夢の中の出来事みたいに亜夢は木馬のことを思い出した。
「そうだ、木馬に乗っていたんだ」
「木馬ははやく回ったもん」
風太が言った。
「馬神が回してくれたんだ」
亜夢は言った。
森の道の近くに来た。
「風の村に行こうよ」
「だけど時間が」
「大丈夫だよ」
「森に行ってはいけないって」
「大丈夫、俺がきっちりお前を帰すから」
また、ピューと風の音がした。

森の道はくねくね曲がっていたり、横道に入ったりした。
「一人では帰れないわ」
「大丈夫送っていくから」
「一時間で帰れるかしら」

「さっきも言ったろう。森の時間は違うって」
「どうして？　説明して」
「説明は出来ない。人間は何でも説明できると思っている。説明できないことの方がずーと多いのに」
「森に住んでいるって……」
「俺は風の子なんだ。木馬は楽しかった」
「そうだ、木馬に乗っていたんだ」
「木馬ははやく回ったもん」
「馬神が回してくれたんだ」
二人はまた同じ話をした。でもここは森の中なんだ。
歩いて行くと森が見えた。森の中に森がある。ざわ、ざわ、ざわと森が騒いでいる。ピューと、森が騒いでいる。
「風の村だよ」
風太が言った。

九　風神

風の村には誰もいなかった。風太も姿を消した。ざわ、ざわという風の音。時々ピューという風の音。木の葉の揺れ。

「目で見ようとするから見えないんだよ」

大きな声が聞こえてきた。

目を閉じると、木々の間を飛び交う風が見えた。後ろにいる風太も見えた。そして、森全体が巨大な風神だった。

「私も見えたかね。この森は私だ。風の神、風神だ」

亜夢は目を閉じると見える世界があるなんて知らなかった。風神は風の袋を少し開けた。風が亜夢の体に当たった。強い風だ。亜夢は二，三歩後ずさりした。

「だって風の神様は好きだもん。怖くないもん」

「俺が怖くないなんて言う人間は初めてだ。いや、一人いたな。あいつはこの森に来て、俺を画いた。俵屋宗達。あいつは夢で私を

見た。夢も現実も一緒だよ」

「私もたくさん夢を見る。怖い夢、悲しい夢、つらい夢。でも醒める。起きたら夢なんだ」

「夢はさめる。でも、現実と一緒なんだよ。今は、現実はさめない夢なんだ」

亜夢は思った。風神は怪物みたいだけど言っている事は先生みたいだ。

「俺も亜夢は好きだよ。この森にはいろんな村がある。亜夢を連れて行きたい」

風太が言った。

「私も行きたい」

亜夢は言った。

「でも、今日は帰ろう」

風太が言った。風神は風の袋を思い切り開けた。亜夢は吹き飛ばされた。気がつくとおじいさんの家の前に立っていた。

十　新しいお父さん

家の中から、お母さんの声がした。
「ただいま」
亜夢は玄関の戸を開けた。大きな靴がおいてある。
「お客さんが来ている。誰だろう」
と、亜夢は思った。お父さんの靴はもう少し小さいと思う。それにお父さんはひもの靴は嫌いだった。
「おや、はやかったね」
おばあさんが言った。柱時計を見ると、家を出た時から、十分も経っていない。風太君と森の道で別れたのだろうか。居間に大きな背中が見えた。振り向いて、ニコニコして、
「おじゃましています」
男の人は言った。
優しそうな人だと、亜夢は思った。
「ちょっと二階に行ってて。話が終わったら呼ぶから」
お母さんは明るい色のワンピースを着て

いた。亜夢が初めて見る服だった。
亜夢は二階に上がってテレビをつけた。下で何の話をしているのだろう。亜夢は気がかりだった。
三十分ほどして、亜夢を呼ぶお母さんの声がした。
ご飯の支度が出来ていた。
「亜夢、紹介するわ。長田(おさだ)和宏さん」
お母さんが言った。
「長田です。よろしくお願いします」
男の人は大人に話すように丁寧に言った。
「新しいお父さんよ」
お母さんが言った。
「えっ、それじゃお父さんは」
「古いお父さんだ」
おじいちゃんが言った。
「こんな時につまらない冗談を言って」
おばあちゃんがおじいちゃんをにらんだ。
「結婚するの」
「結婚」

「そう。亜夢、私達と一緒に住もう。和宏さんもいいって。お父さんとも話し合ったの。お父さんとお母さんはもう会わない。その方がいいって話し合ったの。分かるね亜夢。お父さんは亜夢に会いに来ると思うけど」

「よいパパになるように努力するから」

男の人は言った。

「私、ここにいる。いいよねぇ、おじいちゃん」

おじいちゃんは黙って亜夢の頭をなでた。亜夢は、「わぁ」と、泣きながら、二階へ上がった。亜夢はお母さんが結婚するのが悲しくて泣いたのではなかった。一月（ひとつき）に一回、お父さんとお母さんと亜夢の大切な時間がなくなるのが悲しかった。

十一　見えない訪問者

お母さんがふすまをそっと開けた。亜夢

は寝たふりをした。しばらくすると、玄関で大人たちの話し声が聞こえた。また、しばらくすると、おばあちゃんがふすまをそっと開けた。亜夢は寝たふりをした。おばあちゃんはしばらく枕元でじっとしていた。そして、お布団をなおした。おばあちゃんが出ていった後、枕元に、亜夢のお弁当があった。亜夢の好きな卵焼き、ウィンナー、小さなおにぎり。亜夢は「いただきます」といつものように言って、お弁当を食べた。その後、歯を磨いた。亜夢は決められたことはきっちりとする子だった。その後、おならを一つした。お母さんのおならもたくさん聞いた。お母さんはいつもこう言った。

「ごめんあそばせ」

後は二人で笑う。

「どうする？」

おじいちゃんが言った。

「ここがいやだと言うまで亜夢を育てまし

よう」
「長生きしなければね」
「風が強いね」
「そうですね」
戸を叩く音がした。
「誰だろう」
おばあちゃんが戸を開けた。誰もいなかった。一筋の風が吹き抜けていった。

十二　夢の来客

あなたは夢の世界をどう思っているのでしょうか？　私は異界だと思っています。ほとんどが色のない世界で音もない。不思議な世界です。夢は見るものではなく感じるものだと思います。視覚ではなく感触に近い世界だと思うのです。精神の感触の世界です。ですからあらゆる矛盾も成立します。それではわたしたちは亜夢の夢の世界に入っていこうと思います。

亜夢は森の道にいた。道は薄暗かった。夕方なのだろうか。明け方なのだろうか。

「亜夢ちゃん」

道に風太が立っていた。

「ここは君の夢だよ」

「夢？」

「さあ、行こう」

風太が亜夢の手を取って歩き出した。歩くという感じでなくて、向こうから影絵が迫ってくる感じだった。

行く手に小さな森があった。

「夢の森だよ」

風太が言った。

「夢の森には、夢の道からしか行けないんだ」

道が次々迫ってくる。おじいちゃんやおばあちゃんとすれ違う。クラスの子もいる。スーパーのおばさんもいる。振り返っても誰もいない。ただすれ違うだけ。

いつの間にか亜夢は小さな家の前に立っていた。風太はどこへ行ったのだろう。姿が消えていた。もともと風太に形があったのだろうか。

家の中から人の声がした。大声や笑い声やひそひそ声もした。でも、なにを言っているのか亜夢には分からなかった。

亜夢はドアのノブを押した。中は意外に広くて、多数の人が食事や談笑をしていた。道と同じでレストランの中も薄暗かった。

料理を運ぶ人も食べている人も形がなかった。でも、そこにおおぜいの人がいるのが分かった。お父さんが見ていた古い映画のように。なにも映っていないのにそこにはたくさんの人が行き来していた。

「亜夢、こっちだよ」

窓際のテーブルで、亜夢を呼ぶ人がいる。お父さんだと分かった。お母さんもいる。お父さんとお母さんも形がなかった。

ここは何度か行ったことのあるレストラ

ンだ。レストランも形がなかった。亜夢は形のないものに囲まれていた。出てくる料理には味も形もなかった。でも、とてもおいしいと亜夢は思った。最後にフレンチトーストではなくてデザートがでた。イチゴと生クリームの甘いデザート。甘いはずだと亜夢は思った。

「なあんだなにも変わっていない。お父さんもお母さんも私もレストランも。何にも変わっていない」

亜夢はまわりの騒音が消えているのに気づいた。亜夢のテーブルだけでまわりの人はみんないなくなっていた。

「みんな帰ったのかしら」

お父さんもお母さんもいなくなっていた。亜夢だけがぽっんとテーブルの前に腰かけていた。

十三　夢売り

風太がドアを開けて入ってきた。
「お父さんとお母さんに会えた？」
と、風太が言った。亜夢はこっくりとうなずいた。
二人は外へ出た。家の中も、道も、薄暗い。夢の世界は薄暗い。風太が亜夢の手をとった。亜夢は風太の手を振り払った。
「夢の子供の中には悪い子もいるんだ。悪いっていっても……」
風太は言葉を詰まらせた。亜夢には分かる。これは亜夢の夢だもの。亜夢は風太の手を取った。
「亜夢ちゃん。君は間違っているよ。亜夢ちゃんは自分の夢の中にいると思っている」
「そうでしょう」
「違うよ。夢神が作った森にいる」
「夢神？」
「夢の神様。人が夢を見るのは夢の森に来ることなんだ。この森は、何十億の人の夢

であふれている」
「怖い。帰りたい」
「大丈夫。夢神は怖くない。夢神に会いに行こう」
細い道を歩いた。道で白いちいさなあぶくに出会う。空中に浮いていた。
「夢売りだよ」
風太が言った。
「夢を売っているんだ」
「誰が買うの」
「知らない」
風太は不機嫌な様子で言った。
「どうしてそんなことを聞くの？　夢売りは夢を売る。それでいいんだ」
「楽しい夢を買いませんか」
「美しい夢はいかがですか」
「若い時の夢を買いませんか」
夢売りたちは大きな声を上げて亜夢のそばをすれ違って行った。
「どうしたら買えるの？」

「君はもう買ってしまった」
と風太は言った。
あのレストランだと亜夢は思った。
黒いあぶくも空中に浮いていた。
「悪い夢だ。触らない方がいい」
亜夢は黒いあぶくをさけるようにして歩いた。でも時々当たった。
「大丈夫。悪い夢は悪いことをしない。ぼくと手をつないでいれば大丈夫だよ」
「じゃ、どうしてさけなければならないの？」
風太は答えずにふーんと鼻を鳴らした。

十四　夢神（ゆめがみ）

道は開けた場所に出た。その向こうにすごく高い塔が見えた。上半分は雲の上にあった。塔にはいくつもの銀色のリングが回っていた。
「美しい」

亜夢は思わず叫んだ。

「行こう」

風太が言った。いつの間にか、風太の背中に、つばさが生えていた。後ろを見ると、亜夢の背中にもつばさが生えていた。

「飛ぼう」

風太はつばさを動かした。

「背中に力を入れるんだ」

言われた通りにすると、亜夢の体はふっと空中に浮いた。風太と手を取り合って塔に向かって飛んだ。

「すごい」

亜夢は言った。

「私、飛んでる」

亜夢は歌った。

風が見えるよ、

木の葉は動く、雲は流れる、

チョウは風に乗って、花を探しに行く。

風が見えるよ、
髪は揺れる、波は寄せる、
私は風に乗って、夢を探しに行く

ラ、ラ、ラ、私は風になる
ラ、ラ、ラ、私は夢を探しに行く

二人は雲を突き抜け。頂上に舞い降りた。屋上は小さい庭で、白い花が一面に咲いていた。空中で光っているものがある。目をこらすと、ちいさなしずくだった。

もっと目をこらすと、夢神はしずくの中にいた。白い服を着た女の人だった。後藤先生に似ている。

「こんにちは、亜夢」

夢神は言った。

「こんにちは夢神さん」

亜夢が言った。

「亜夢、亜夢が生きているということはとても不思議なことなんだ。まずお父さんとお母さんがいなければ亜夢はいない。お父さんのお父さんやお母さんがいなければお父さんがいない。お母さんだってそうだよ。おじいちゃんとおばあちゃんがいなかったらお母さんはいない。だから誰でも生まれたことに感謝しなければいけない。少しむつかしいかもしれないけど」

夢神は言った。そして消えた。

「夢神は優しい神様ね」

亜夢が言った。

「神様には優しい神様も恐ろしい神様もないよ。夢神は夢を食べる。それが恐ろしいことにもなるんだ」

風太が言った。

戸を叩く音がした。

「誰か来たのかなあ」

おじいちゃんが戸を開けると、おばあち

やんの横を一筋の風が通りぬけていった。
一瞬それは子供の姿のように見えた。
亜夢が目を覚ますと、夢のほとんどが夢の世界に帰って行った。夢のレストランだけがかすかに残った。

十五　光神（こうじん）

「もどり橋に幽霊が出るそうですよ」
晩ご飯の時におばあちゃんが言った。
「もどり橋って？」
亜夢が聞いた。
「学校から、もう少し行ったところだよ」
おじいちゃんはぽつりと言って、煙草に火をつけた。
「亜夢は学校より先は行かないからね。行かない方がいいよ。川は危険だから。もどり川には下流に下から上に水が流れている場所があるんだ。錯覚だけどね」

もどり川の川幅はせまい。下流に行くにしたがって川幅は広くなり、川が上流へ向かって流れているように見える。亜夢は自動車で通ったことがある。

「ほら、ほら」

と、おばあちゃんが指さしたけれど、亜夢にはよく分からなかった。

「もどり橋を何回渡っても向こう岸に着かないという言い伝えがあるの」

おばあちゃんが言った。

「幽霊って？」

亜夢は寝る前におばあちゃんに聞いた。

「幽霊……。ああさっきの話ね。怖い夢を見たらいけないから」

おばあちゃんは亜夢の頭をなでた。

亜夢と良太と七海ちゃんが並んで学校へ行く途中に

「幽霊っているの？」
と亜夢は二人に聞いた。
「そんなのいないよ。お母さんが言ってたもん」
七海ちゃんが答えた。
「いるかもしれない」
良太が言った。
「お客さんが話していたって」
良太のお母さんは保険会社で働いている。酒屋さんを訪問した時のことだ。
「奥さん、うちの亭主が幽霊を見たって」
「幽霊」
「もどり橋の近くでね。配達に行った帰りに」
「白い着物を着た人が橋のたもとに立っていて、声をかけると、ふっと消えたんだって」
良太が言った。
「見間違えか何かよ」
七海ちゃんが先生みたいに言った。

学校からの帰り道に、
「ちょっとだけもどり橋を見に行こうよ」
良太が言った。
「いや」
亜夢が首を振った。
「ちょっとだけだよ。五分もかからない」
良太は言い張った。
「いや、こわいもん」
七海ちゃんも首を振った。
「おばあちゃんが行ってはいけないって」
亜夢は言ったが、気持ちは反対だった。
まだ明るいし、少しぐらいと思った。七海ちゃんも一人で帰るのがいやだった。
「少しなら」
亜夢が言った。
「わたしも」
七海ちゃんがしぶしぶ言った。
人通りも多いし、生徒もたくさんいる。
穏やかな昼下がりだった。

「なあんだ、これじゃ冒険にならないなあ」
良太がガッカリした感じで言った。
「みんな普通だもん。やっぱり夜中に来なくちゃ幽霊はあらわれないよ」
良太が言った。
もどり橋も人通りが多い。みんな平気で渡っている。
「帰ろうよ」
七海ちゃんが言った。その時、まわりがふっと薄暗くなり、まわりの人々が消えた。
「みんな消えたよ。こわい」
七海ちゃんは泣き声で言った。
「大丈夫」
良太は男らしく言った。でも声は震えていた。
「誰かいる」
亜夢が言った。
「橋を渡ろうとしてる」
良太が言った。女の人はまばゆいばかり

に輝いていた。
「あれ、また渡ろうとしている」
良太が言った。七海ちゃんもこわごわ目を開けた。不思議な光景だった。女の人だけが光っていて、まわりは薄暗いのだ。女の人は、亜夢たちに気づいた。
「森に来た子だね」
美しい人だった。
「わたしはアマテラス。光神(こうじん)なの。この橋を渡って、森に帰りたいのに。なんど渡っても、もどってきてしまう」
アマテラスは悲しそうに言った。
「一緒に渡って」
アマテラスが亜夢の手を取った。とてもあったかい手だった。お母さんの手みたいだと亜夢は思った。七海ちゃんも手をつないだ。亜夢は良太と手をつないだ。
「うわあ光っている」
亜夢は思わず叫んだ。亜夢も七海ちゃんも良太もアマテラスと同じように光り輝い

ている。橋を進んでいった。お囃子が聞こえてくる。それに混じって歌も聞こえてくる。

もどり橋、もどり橋、もどり橋
とこまで行っても渡れない
もどり橋、もどり橋、もどり橋
とこまで行っても渡れない

橋はとても長かった。やっと向こう岸に着いたと思ったら、四人は元の橋のたもとに立っていた。アマテラスの光が薄くなっていく。それにつれて川の音が聞こえ始める。まわりのざわめきがもどり、アマテラスは消えた。

三人は帰り道で、誰にも言わないと約束した。言っても誰も信じないし、三人だけの秘密がいいと思った。アマテラスの手はお母さんみたいだった。それを思うと涙が出た。

「どうしたの」
七海ちゃんが聞いた。
「アマテラスの手はお母さんみたいだった」
亜夢は泣きじゃくりながら言った。七海ちゃんもとても悲しい気持ちになって泣き出した。
良太が汚いハンカチを亜夢に渡した。
「泣くなよ」
良太はそう言ったが良太も泣き出した。

十六　光の子供たち

タマが昼寝をしている。森の中を歩いている。亜夢ちゃん、良太君、七海ちゃんも一緒だ。カラスのカーもいる。でも、森は暗い。真っ暗だ。なんて暗い森だろう。カーの羽根のようだ。
今日は月に二回の外で給食を食べる日だ。

給食のおばさんがサンドイッチやおにぎりなどを作ってくれる。今日はおにぎりだ。亜夢、七海ちゃん、良太の他にも、山田さん、鈴木君、樹里ちゃんもいる。亜夢と一緒に食べたらおいしい。それは亜夢がよく笑う子だから。

今日は後藤先生も仲間入りだ。

フェンスの上で光っているものがある。

「あれ、何だろう」

七海ちゃんが言った。

「なに？」

後藤先生が言った。

「フェンスの上で光っている」

「何だろう」

亜夢も良太も言った。

「先生には見えないわ」

後藤先生を呼ぶ声がした。先生は急いで立ち上がった。

「もう少し近づいてみよう」

良太が言った。

フェンスの上で光のボールが三つ浮かんでいた。
「光の子供」
「光の子供」
「光の子供」
ボールは同じ言葉を喋った。真ん中の子供は女の子だ。
「森に行った子供にしか見えないんだよ。言葉も聞こえない」
「大人はみんな見えないけれど」
「だって森に行かないもん」
「私達も森へ行ったことがない」
亜夢は言った。
「来たよ。木馬に乗ったじゃない」
女の子が言った。
「楽しかったなあ」
左の男の子が言った。
「馬神（うまがみ）が木馬をはやく回してくれた」
「君たちの名前は？」
七海ちゃんが聞いた。

「名前なんてないよ。みんなみんな光の子供だよ。アマテラスを探しに来たんだ」
「光の森は真っ暗になってしまった」
「アマテラスがいなくなったから」
「昨日もどり橋で会ったよ」
と、良太が言った。
「連れて行って」
三人が声をそろえた。
「でも、学校が終わるまで待ってよ」
と、良太は言った。そんなに簡単に言っていいのかなあ。
「家に帰っても誰もいないのだ」
亜夢は思った。
「私も行く」
亜夢が言った。
「私も」
七海ちゃんが言った。
その時、昼休みの終わりを知らせるチャイムが鳴った。

光の子供たちは三人の子供たちの肩にのった。

もどり橋、もどり橋、もどり橋
とこまで行っても渡れない
もどり橋、もどり橋、もどり橋
とこまで行っても渡れない

七海ちゃんが歌った。七海ちゃんは歌がとても上手だ。

「もどり橋って？」
「アマテラスが森に帰ろうとしても、橋を渡れない」
良太が言った。
「もどってしまうのね」
亜夢が言った。
「森へ行く道と森へ帰る道は違うの」
女の子が言った。
「きっとその橋が帰る道なんだ」

亜夢の肩にのった子供が言った。

もどり橋、もどり橋、もどり橋
とこまで行っても渡れない
もどり橋、もどり橋、もどり橋
とこまで行っても渡れない

三人と三つは歌い出した。

もどり橋に着くと待っていたかのように
あたりが暗くなった。

「来てくれたのね」

「あなたがいなくなってから、光の森は真っ暗」

「ここへ来る道は誰に聞いたのですか？」

「影の国のアリス」

「影の国のアリスって子供でしょ」

「違うよ。アマテラスとそっくりな人」

「私と……」

「アリスは言ったよ。一度だけ行かせてあげる。でも一度だけだよって」

アマテラスは考えていた。そして亜夢の肩に手を置いた。

「亜夢、影の国に行ってアリスに会ってほしいの。もどり橋を渡れる方法を聞いてほしい」

「お願い亜夢ちゃん、良太君、七海ちゃん」

光の子供たちが声を合わせた。

「光の森がなくなってしまう」

十七　影の国のアリス

亜夢たちは光の子供たちと別れた。光の子供たちもアマテラスと同じでもどり橋からしか森に戻れない。

三人は森に入った。猫のタマとカラスのカーも来ていた。

森の門番に出会った。

「どこへ行くのかね」

「影の国」

亜夢は言った。
「今日はトマトを持っていないな」
「あっ、そうだった」
七海ちゃんが言った。
「通すわけにはいかない」
キツネの門番は手を広げた。亜夢たちはトマトを取りに森を出た。でも、森を出れば森の出来事を忘れてしまう。
「どうしたの？」
光の子供たちが聞いた。亜夢たちはなんども森に入り、門番に追い返され、また、森から出て来た。八度目だった。同じ繰り返しに、門番は堪忍袋の緒が切れた。
「次に手ぶらできたら、最初にカラスを食うぞ。次に手ぶらできたら、猫を食うぞ。次に手ぶらできたら、女の子から食ってやる」
門番の口が耳までさけた。その時どこからか声が聞こえた。
「ぼくの友達だよ」

「風太か。でも、何にもなしじゃやっぱり通せない」

一瞬強い風が吹いた。門番の足もとに、亜夢が見たこともない果物がいくつも落ちてきた。すごくいい香りがする。門番は舌なめずりをした。そして、むしゃむしゃと食べ始めた。

「うまい。森の果物の中で梨が一番うまい」

「それって梨」

七海ちゃんが言った。丸いバナナのような形をしていた。

「ほれ、お前らも食べてみろ」

皮はバナナのようにむけた。

「梨の味だ」

無口なタマが言った。

「うまいぞ、うまいぞ」

カラスのカーが羽根をばたつかせながら言った。

「おいしいね」

三人は言った。
「でも、おじいちゃんのトマトの方がおいしいよ」
亜夢は門番に聞こえないように小さな声で言った。

十八　不思議な楽器

門番はおなかがふくれると横になって眠り始めた。
「さあ行こう」
いつの間にか風太が現れた。
「影の国に行きたいの」
亜夢は言った。
「影の国は危険だよ」
「でも、アマテラスが帰れないと、光の森は真っ暗なままなの」
七海ちゃんが言った。
「光の森は真っ暗だって誰かが言っていた」

「アリスに会わなければ」
良太が言った。
「アリスに会ってもどり橋を渡る方法を聞くの」
亜夢は言った。
「分かった。でも、アリスは変わり者だよ」
音楽が聞こえてくる。
「影の国へ行くには音の森を通るんだ」
風太が言った。
楽団が演奏をしていた。子供もおじいちゃんもいる。みんな楽しそうに演奏をしていた。見たこともない楽器もある。カタツムリの形をしていた。それをおじいちゃんと子供が吹いている。
「あの楽器は音の妖精を呼ぶんだ」
子供が吹くとシャボン玉が出てくる。シャボン玉の中に音の妖精がいる。妖精たちは美しい音を奏でる。
明日は明日

昨日は昨日
今が好き
すぐに消えてしまうけど
今が好き
あぶくのような今が好き

もう一つの不思議な楽器をおじいちゃんが吹くとシャボン玉が出てくる。

今って、なあに？
今ってなあに？
あっという間に過ぎ去っていく
今ってなあに？
不思議な楽器が答える。
今って今よ
そうしか言いようがない
今って今よ

「もうじき演奏会があるんだ。きっと亜夢ちゃんにも招待状が届くよ」

「行きたい！」
三人と二つは同時に言った。
七海ちゃんが歌う。

明日は明日
昨日は昨日
今が好き
すぐに消えてしまうけど
今が好き
あぶくのような今が好き

七海ちゃんは歌が上手だ。でも、ちょっと自慢しすぎと亜夢は思った。でも、きれいな声だなあ。亜夢も七海ちゃんみたい歌えたらなあ。
音の森を通り過ぎた。演奏は聞こえなくなった。
「夢と同じ道だ」
無口な猫は思った。

十九　影売り

闇が段々濃くなる。少し気温も下がった。

「ここからは影の国だ」

風太が言った。

「影売りには気をつけて」

夢の森には夢売りがいた。

「話しかけられても喋ってはいけないよ」

「無視するの」

七海ちゃんが聞いた。

「無視すると影売りは怒るから」

「それじゃどうすればいいんだ」

カーが言った。

「首を振る。うなずいたらダメだよ」

最初の影売りは七海ちゃんの影から立ち上がった。

「可愛いお嬢ちゃん。あなたの影を売ってくれないか。もっと可愛い影をあげるから」

七海ちゃんは一生懸命首を振った。

「ダメか」
影売りは消えていった。
亜夢の影から次の影売りが立ち上がった。
「お前の可愛い影を売らないか」
亜夢は一生懸命首を振った。影売りは光るものを亜夢の顔に近づけた。美しい青い玉だった。
「影をくれたらこれをやるよ」
亜夢はまた一生懸命首を振った。
「チェ、ダメか」
「男の子の影は値打ちがある」
良太の影から立ち上がった影売りが言った。
「強くて濃くってさあ」
影は舌なめずりをした。
「おいしいんだろう」
風太が言った。
「風の子か。お前はもともと影なんかないくせに。口差しをするな！」
良太も首を振った。

影売りがタマの影から立ち上がった。
「可愛い猫だ。影を売らないか。虎の影と交換しよう」
タマは首を振った。カラスのカーの影からは影売りが立ち上がらない。
「何だよ、ぼくの影はいらないの」
「カラスの影なんかいらないよ。お前が影みたいだ」
影売りは大笑いした。
「だけど口をきいたからいただいておく」
カーの影がカーの体から飛び出した。
ますます道は暗くなっていった。もう影も映らない。
「もう、影売りは出ないよ。真の闇の奥にアリスがいる」
風太が言った。

二十　奈落

「アリスがいる」

風太が言った。ぼんやりと光っている。アリスはアマテラスとそっくりだった。でも冷たい光だ。

「人間がここまで来るなんて」

アリスはにこりと笑った。ヒューと冷たい風が吹いた。

「闇は自由よ。見えないものも見える。見えるものしか見えない世界なんてつまんない」

アリスはつまらなさそうにため息をついた。美しい人だ。ため息まで美しい。

「アリスさん」

七海ちゃんが言った。

「アマテラスさんがもどり橋を渡れないので困っています」

亜夢が言った。

「当たり前だわ。当たり前だのクラッカー（このギャグを知っている人はかなり古い）。森の外に出たいっていうから教えてあげたのよ。でも行く道と帰る道は違うの」

「光の森が真っ暗になった」

良太が言った。
「そんなの私には関係がない」
アリスは言った。
「それよりもっと前に。光の輪の中へ。来たら教えてあげるかも。かもはかも鍋。笑わない。私の親父ギャグが通じない！」
アリスの前に冷たい光の輪ができていた。
「本当に教えてくれるの」
亜夢が言った。
「かもよ」
「どうしよう」
七海ちゃんがみんなの顔を見た。
「行こう」
良太が言った。
「行こう」
カーも言った。
「行かなきゃ何にも始まらないわ」
無口な猫が言った。
亜夢たちは光の輪に向かって歩いた。その時、亜夢らを吹き飛ばす強い風が吹いた。

「風神！」
アリスは叫んだ。
「風太だけじゃ心配だから来たんだ。その輪の中に入ると奈落に落ちる」
「奈落って」
良太が言った。
「地獄だよ」
風神が言った。
「お久しぶりね、風神。ますます不細工になって」
アリスは軽やかに笑った。美しい、でも冷たい。
「アマテラスがいなくなって光の森は困っている。お前はアマテラスの影ではないか。アリス、お前は間違っている」
「お前だなんて。あんたに言われたくない」
アリスは言った。
「本体と影は別々の森に住んでいる。でも、無関係じゃない。どちらかが成長すればこ

ちらも成長する。どちらかが死ぬとこちらも死ぬ。アマテラスが死ぬとお前も死ぬ」

「また言った！」

アリスが氷の矢を放った。風神は素早くかわした。

「アマテラスは死なない。ただ森に帰れないだけ。この森にもう一つの私はいらないの」

風神は風袋をかまえた。

「お前を吹き飛ばしてやる」

「野蛮だなあ。最後はおどし。でも、吹き飛ばされるのもいやだから。森に帰れる方法を教えてあげる。もどり川に飛び込むのよ。それがたった一つ森に帰れる方法」

「分かった。この子らはわしが送っていく」

「でも、森を出れば、森の出来事を忘れてしまう」

亜夢が言った。

「賢い子だ」

風神が亜夢の頭をなでた。
「風太が夢の道を通って亜夢ちゃんの家に行くよ。夢を忘れなかったら、大丈夫だ」
亜夢らは風に飛ばされた。

また森の入り口に立っていた。
「やっぱりダメだったんだ」
光の子供は言った。
「ごめん」
良太が言った。光の子供たちは首を振った。
「ありがとう」
「明日になれば何かが変わるかもしれないね」
女の子が言った。
「いいえ、もう変わっているのかもしれない」
七海ちゃんが言った。カーの影はなくなっていた。でも、そんなことは誰も知らない。カーも知らない。カーの影が影の国を

飛び回っているのも。

二十一　この夢を忘れてはダメ

今日は不思議な一日だった。

晩ご飯の時、亜夢はおじいちゃんに聞いた。

「アマテラスってどんな人」

「神様だよ」

「神様って？」

「うーん」

と、おじいちゃんはうなった。

「人間を超えたもの」

「人間じゃないの」

「そう、人間じゃない」

おじいちゃんは言った。

「亜夢は神社に行ったら、手を合わせるだろう。なにに向かって手を合わせているの」

おばあちゃんが言った。

「誰って……。そうしなさいって言われたから」

おじいちゃんは大笑いをした。おばあちゃんは亜夢の頭をなでた。

「アマテラスは古事記や日本書紀に登場する神様だよ。古事記や日本書紀は日本を作った神様について書かれた神話なんだ。亜夢も大きくなったら読んでごらん。アマテラスは太陽神なんだ」

「光の神様だね」

「そういってもいいよ」

「アマテラスがいなくなると真っ暗になるの？」

「そうだね。アマテラスが天岩戸という岩でできた洞窟に隠れてしまって、一日中夜になった話があるよ」

亜夢にはおじいちゃんの話が面白かった。

「アマテラスはいるんだ」

と思った。

「わたし、アマテラスに会ったよ」

と、言いかけて、七海ちゃんや良太との約束を思い出した。

おばあちゃんとお風呂に入りながら、

「神様っているよね」

と聞いた。

「いるとも」

おばあちゃんは亜夢のちいさな背中を流しながら言った。

「かわいそうに、両親と離れて、この子は淋しいのに一生懸命生きている」

おばあちゃんの目から涙が落ちた。

亜夢が二階の部屋に上がると、玄関の戸が開いた。

「やれ、やれ、この家も古いからなあ」

と、おじいちゃんはお酒に酔って、足をふらつかせながら、玄関の戸を閉めに行った。その時、いちじんの風が吹いた。小さな子供が駆け抜けていった。

「どこの子だ？　今子供が入ってきた」

「誰もいませんよ」
おばあちゃんは笑いながら言った。
「酔ってしまったかなあ」
おじいちゃんは頭をかきながら苦笑いをした。
亜夢は前にも同じ夢を見た気がした。
亜夢は森の道にいた。道は薄暗かった。夕方なのだろうか。明け方なのだろうか。
「亜夢ちゃん」
道に風太が立っていた。
「ここは夢の国だよ」
「夢の国？」
「アマテラスに伝えて」
「なにを？」
「もどり橋を渡れる方法は川に飛び込むんだ」
「そう言えばいいの」
「橋があるから渡ろうとする。この夢を忘れてはダメ。言ってみて」
「もどり橋を渡れる方法は川に飛び込む」

「もう一度」
「もどり橋を渡れる方法は川に飛び込む」
亜夢は目を覚ました。急いで今見た夢を書いた。
「もどりばしをわたれるほうほうはかわにとびこむ」
また、玄関の戸が少し開いた。ちいさな影がでていった。
「年のせいだね。ずいぶん目が悪くなった」
おばあちゃんは目をこすりながら、玄関の戸を閉めた。
「今日も平穏でありがとうございました」
おばあちゃんは神棚に手を合わせた。

二十二　虹の橋

「昨日夢を見たの」
学校からの帰り道に亜夢は言った。
「どんな夢？」

七海ちゃんが聞いた。
「もどり橋を渡る方法」
亜夢は言った。
「アマテラスが森に帰る方法だよ」
良太が言った。
「川に飛び込むの。橋があるから渡ろうとする」
亜夢は言った。
「アマテラスに教えてあげなきゃ」
七海ちゃんは言った。
「それじゃ三人でもどり橋に行こう」
良太が言った。良太は頼りになる男の子になったと亜夢は思った。ちょっと前はおねしょをしたり、先生に指されても答えられない頼りない子だったのに。男の子って強いんだ。森に行くことで強くなったんだ。七海ちゃんもそうだ。でも、わたしはどうだろう。めそめそして、お母さんのことをいつも思っている。弱い子だ。
「大丈夫、亜夢は強い子だよ」

亜夢の思っていることが分かったのだろうか。七海ちゃんは言った。

「いつも一緒だよ」

良太が言った。

「昨日見た夢を忘れずに頑張ったんだから」

七海ちゃんが言った。

「アマテラスを光の森に帰してあげようよ」

良太が言った。

もどり橋の付近はいつものように人通りが多い。三人は辛抱強く待った。時々すれ違う友達が「どうしたの？」と、声をかける。「暗くなると幽霊が出るぞ」と脅かす男の子もいる。

少しずつ暗くなってきた。人通りも途絶え、まわりに誰もいなくなった。白い服が見え始め、輝くアマテラスが現れた。光の子供もアマテラスの肩に止まっている。

「もどり橋を渡る方法を教えて下さい」

アマテラスが言った。
「川に飛び込むの」
亜夢が言った。
「渡ろうとするから渡れない」
良太が言った。
「分かった」
そう言うなり、アマテラスは川に飛び込んだ。アマテラスは川に流される。
「アマテラスは泳げない」
光の子供が叫んだ。
「泳げないの」
亜夢は言った。
「ばーか、だまされた」
どこかからそんな声が聞こえた。アマテラスはドンドン流されていく。その時、稲光が空を切り裂いた。激しく雷が鳴った。
「こわい」
七海ちゃんが泣き出した。激しい雨に三人はずぶ濡れになった。
「あっ」

良太が空を指さした。
「雷神だ」
雷神がバチで太鼓を叩いた。ドンドドン、ドンドドン、ドンドドン、どんどととどんどととと。もどり橋の歌だ。
「お前達も歌え」
耳をつんざくような大きな声が空から落ちてきた。
もどり橋、もどり橋、もどり橋
とこまで行っても渡れない
もどり橋、もどり橋、もどり橋
とこまで行っても渡れない
三人と光の子供たちは太鼓に合わせて大声で歌った。
「川が」
亜夢が指さした。
「反対に流れている！」
良太が叫んだ。遠くにアマテラスの姿が見えた。
「そうら、もう一息だ」

雷神が言った。
ドンドドン、ドンドドン、ドンドドン、
どんどととどんどととと。
もどり橋、もどり橋、もどり橋
とこまで行っても渡れない
もどり橋、もどり橋、もどり橋
とこまで行っても渡れない
アマテラスが橋の近くまで流されてきた時、空中に虹がかかった。いつの間にか雨は止んでいた。雷神が一つ大きく太鼓を叩くと、川の水はせり上がり、アマテラスは虹の橋にいた。
「さようなら」
アマテラスは手を振った。光の子供たちも手を振っている。亜夢らも手を振った。アマテラスたちは虹の橋を渡り始めた。
アマテラスは振り向いた。
「また会えるといいね」
そう言って虹の橋の向こう側に消えてい

った。いつの間にか雷神は消えていた。まわりが騒がしくなり、いつもの光景に変わった。服も濡れていない。

「また会えるといいね」

三人は手をつなぎながら、もどり橋を渡った。

三人は手をつなぎスキップしながら、もどり橋を渡った。

もどり橋、もどり橋、もどり橋
とこまで行っても渡れない
もどり橋、もどり橋、もどり橋
とこまで行っても渡れない

二十三　眠り姫

森の奥まったところに小さな眠りの森があります。住んでいるのは眠り姫と姫のお世話をする女狐が二匹。女狐は人の姿をしています。一匹はあさぎ。もう一匹はヨモギ。あさぎは茶色のキツネ。ヨモギは白い

キツネです。あさぎとヨモギは姉妹です。猟師に撃たれた母ギツネが必死に巣までもどり息絶えたのです。通りかかった殿様が巣穴で泣く二匹の子狐を不憫に思い家に連れて帰ったのです。この恩は計り知れない程です。

眠り姫は輝くような美しさです。今にも、起き上がってきそうです。女狐が一日に二度石清水でお口をぬらせてさしあげます。石清水には全ての栄養素が含まれているのでしょう。それだけで何年も生きておられるのです。

眠り姫が眠りに落ちたのは、眠りの森の奥深くに咲く美しい眠り草の花の香りをかいだからです。それから十年も眠り続けておられます。乳房がふくよかになり、月のものも始まりました。

眠り姫のお世話はむつかしいものではありません。ほとんど食事をされないのですから、排泄物もほんの少しです。自分のこ

との方がはるかに大変です。

わたしですか？　あさぎと申します。姫の父上は眠りの森を治める殿様でした。母上も美しい人でした。二人は私達キツネのようなものにも優しくしていただきました。母上は姫が眠りについたのを悲しみ千日の嘆きのすえなくなりました。父君は気丈に悲しみに耐えておられたのですが、有名な予言者が、―それは金色のキツネでした―やってきて「姫は死ぬまで目覚めない」と予言した時、矢が折れるように亡くなりました。それからは、あさぎとヨモギが姫に仕えています。

夢神が時々遊びに来ます。夢神はとてもわがままです。一日に何回も来たり、何ヶ月も来なかったりするのです。姫の夢の中でどんな話をしているのでしょう。眠り姫の話す相手は夢神だけです。夢神が来た時、時々笑われるのです。

眠り姫を目覚めさせる「目覚めの草」があると聞きました。目覚めの草を求めて、いくつもの森を旅したのですがそんな草はありませんでした。でも、夜中の森でわたしは聞いたのです。夜中の森は一日中ずーと夜なのです。だから、眠りについて知っている人が多いのです。

「目覚めの草は森の外にある」

夜中の森で聞いたのですから、誰が言ったのか分かりません。でも、私には聞こえたのです。

二十四　眠り姫の夢

森以外に世界がある。私達は森で生まれて森で死んでいくのです。まだ見ぬ世界があるとは！

ある時、わたしはついうとうとと眠ってしまったのです。夢神が来たと思いました。小さなしずくが空中に浮かぶのです。しず

くがはじけると姫の夢に入ったのです。偶然わたしも姫の夢に入りました。

そこは光り輝く世界でした。色彩も豊かでした。わたしたちキツネは赤い色と数種類の色しか見えないのに、姫の夢の中では無数の色が見えるのです。音楽も聞こえました。今まで聞いたこともない美しい音色でした。次に花畑が現れました。白い花ばかりです。姫がいました。花を摘んでいるのです。笑顔が一杯です。姫の横に夢神がいます。姫に語りかけています。花の色が白から黄色に次々に変わっていきます。

姫はこんな素晴らしい世界に生きておられる。不幸だとか可愛そうだとか思うのは間違っていたと思いました。

「誰だ！」

夢神がわたしをにらみました。とたんに口が耳までさけて恐ろしい顔になりました。

「夢の中に入れるのわたしだけ。お前は誰だ！」

わたしは夢から覚めました。夢神の恐ろしい顔が目に焼きついていました。はやく目覚ていただかなければ姫が夢神に食べられてしまうと思ったのです。

ヨモギに姫のことを頼み、わたしは旅に出ました。

二十五　あさぎ

わたしはキツネの姿になり、道を急ぎます。四本足の方が走りやすいのです。

わたしはまず長老の森に行ってみることにしました。西の方角にあるというだけが頼りです。もちろん行ったことはありません。長老なら知識も多いのではないかと思ったのです。日が西の空に沈みました。今日はここまでと決めて、ねぐらを探しました。格好の穴を見つけました。ここならぐっすりと眠れるぞ。

眠ると夢神がわたしの夢にやってきまし

た。
「あさぎ、無駄なことはおやめ」
美しい夢神は言いました。
「目覚めの草はあなたなんかには見つけられないわ」
「あなたはどうして姫の夢に入るのですか」
「どうしてって言うのは方法という意味？　目的という意味？　キツネは馬鹿だから言葉の使い方を知らないのね」
「目的の意味です」
「眠り姫の夢がおいしいからよ」
「姫の夢を食べているのですか」
「キツネの夢なんか食べる気にもならないわ。まずい」
「全部食べてしまうと、姫は」
「死ぬの。だから、あさぎは目覚めの草をその前に見つけないとね」
「目覚めの草はどこにあるのですか？」
「知らない。知っててても教えてあげない。

あんなにおいしい夢はないんだから。それもずーと眠っているんだから。濃厚な味なのよ」

夢神は舌なめずりをしました。夢から覚めると、目の前で小さなしずくがはじけました。夢神が帰ったのです。

二十六　長老の村

今日も一日中駆けたのですが誰にも会いません。同じ所をぐるぐる回っているのでしょうか？　キツネにだまされているのかもしれません。キツネがキツネにだまされる。老いたキツネなら……。

「どうしたの？」

大木が声をかけてくれました。

「長老の村へ行きたいのです」

「もうすぐだよ。長老たちは時々ここまでやってくるから。お年寄りが来るくらいの距離だよ」

「ありがとう、それじゃ一気に行くよ」
わたしは走り出しました。森を抜けると、ぼんやりと灯りが見えました。
道で猫に会いました。
「どこへ行くのかね」
猫が言いました。
「長老の村です」
「ここが長老の村だ」
長老の村は老いた猫たちの村だったのです。猫は死を感じると、この村にやってきて、死を迎えます。
「でも死なずに生きている百才の猫もいる。最長老様だ」
「聞きたいことがあるのです」
「わしが知っていることなら教えてあげよう」
「目覚めの草のことです」
「目覚めの草？　知らないなあ。最長老様ならご存知かもしれない。おいで」
猫は先に立って歩きました。猫屋敷は大

きく、様々な猫が住んでいました。三毛猫、虎猫、黒猫、白猫。庭に面した廊下に並んでいます。最長老様の部屋は廊下の突き当たりにありました。

「最長老様、お会いしたいというキツネを連れてきました」

「キツネか。退屈していたので会ってもいい」

最長老様は巨大な三毛猫でした。小さな虎みたいだ。あさぎは思いました。

「キツネか、珍しい」

しわがれ声ですが、堂々としていました。

「聞きたい事って何だ」

「目覚めの草のことです。生えている場所を知りたいのです」

「目覚めの草……。なぜ」

「姫を目覚めさせるためです」

「姫って？」

「眠り姫です」

「風の便りに聞いたことがある」

あさぎは姫が眠ってしまった顛末から、夢神のことまで話しました。最長老様は目をつむり黙って聞いていました。時々ピーンと張った長いひげが動きました。

「ここにはない。人の世界にある」

「人の世界」

「異界だ」

「どうしたら行けるのですか」

「もし、人の国に行けたら。いわしという魚を持ってくると約束するなら教えてやる」

「いわし」

「この世のものと思えないほどの珍味だと聞いた。森ネズミはあきた」

「約束します」

この約束であさぎが命を落とすことになるなんてその時のあさぎは考えもしませんでした。

「時々人の世界の猫がここに遊びに来る。そいつについていけば行けるかもしれない。

名前はタマだ」
「ありがとうございます」
わたしは深々と頭を下げました。
私は長寿の森を出ました。細い道をゆっくりと歩きました。時々まわりを見わたし、猫を探しました。
タマがいました。
「ふんふん」
と、鼻を鳴らしています。
「タマ？」
「そうですよ。キツネの知り合いはいないけど……」
タマが答えました。
「君は？」
「わたしはあさぎ。人の世界へ行く道を教えてほしいの」
「森への道は亜夢ちゃんの家の縁の下にあるの。おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんのそのまたおじいちゃんの時の井戸な

の」

「それが人の世界と森をつなぐ道なの？」

あさぎは言いました。

「多分そういうことなのね。私は行ったり来たりできるの。行く道と帰る道が違うなんてややこしいことはない。でもあなたは帰る道は違うと思う。アマテラスはアリスにだまされておよげないのにもどり川に飛び込んだけれど」

タマは笑いました。いっしょにタマのひげがぴくりと動きました。細い道をタマとあさぎは歩きました。一匹しか通れない狭い道を抜けると筒の底に出ました。

「井戸だよ」

タマが言いました。

タマはなれた動作でつるべをつかみ上がっていきました。あさぎも苦労しながら上がりました。

「ついたよ」

タマが言いました。

明るい庭の光が縁の下にも差し込んでいました。

二十七　転校生

十一月。秋は深まり、イチョウ並木は黄金色に輝き、風が吹くと落ち葉がかさかさと音を立てる。亜夢と良太と七海ちゃんは黄金のじゅうたんの上を学校へ行く。学校に入ると一年二組の教室に入る。

亜夢の席は隣が空席だ。生徒が三十五人だから、誰かの横が空席になる。亜夢は少し淋しかったけれど仕方がないと思っていた。でも、その朝、亜夢の横の席に女の子がいた。とても可愛い女の子だった。

「こんにちは」

女の子は言った。

「おはよう」

亜夢も言った。

「わたしは今田（こんだ）あさぎ。転校生なの」

「どこから来たの？」
「森からよ」
女の子はにっこり笑って答えた。
「よろしくね」
亜夢が言った。
「わたしは亜夢。あゆめって言ってね」
「わたしもあさぎでいいよ」
亜夢はすぐに仲良しになれると思った。
授業が始まるまで時間があったので、二人はもう少しおしゃべりをした。
「すきなものはおじいちゃんが作っているトマトよ。今はないけど、夏が来たらいっしょに食べよう」
「楽しみだなあ」
「あさぎちゃんが好きなのは？」
「油揚げ」
「油揚げなの」
亜夢は朝の味噌汁に入っている油揚げはあまり好きではなかった。ちょっと不思議な女の子だなあと亜夢は思った。

二十八　目覚めの草

亜夢たちが三角と言っている三叉路で亜夢は良太と七海ちゃんと別れた。三人が別々の道を帰る。秋は夕暮れが早い。つるべ落としと言うんだよとおじいちゃんが言っていた。「つるべ落としって？」と、聞くと、「ちょっと待ってね」と言って、コンピューターをさわっていた。

「これこれ、井戸から水をくみ上げるときにつかう桶のようなものなんだ。滑車がついていて、手を離すとするすると真下に落ちる。秋は夕暮れが早いことをたとえているんだよ」

その後、

「井戸もなくなったなあ」

と、ため息をついた。

「昔はあったそうですよ」

おばあちゃんが言った。

今まで家の屋根の上に見えていた夕日がカーキ色に空を染めて落ちるように沈んでいく。

暮れなずむ行く手に誰かが立っていた。

「あさぎちゃんだ。わたしの方がはやく学校を出たのにいつ追い抜かれたんだろう……」

「亜夢ちゃん、教えてほしいことがあるの。いい」

「いいよ」

「遅くなったら悪いから、簡単に言うね。目覚めの草って知っている？」

「目覚めの草。知らない。おじいちゃんに聞いてあげる。おじいちゃんは物知りで、コンピューターも使えるの」

「コンピューター？　それじゃお願いね」

あさぎは走って帰っていった。

「不思議な子だなあ」

と、また、亜夢は思った。

夕ご飯の後、お茶を飲んでいるおじいちゃんに亜夢は聞いた。お酒を飲むとすぐに眠ってしまうから。

「おじいちゃん、目覚めの草ってなあに」

「知らないなあ、おばあさんはどうかな」

「わたしも知りませんねえ」

「それじゃインターネットで調べてみようか。どっこいしょ」

と、立ち上がった。

「ヒットしないね。目覚めの草という歌ならあるよ。プリントするね」

フリガナが振ってあるので亜夢にも読めた。

眠り姫が目を覚ます。
目覚めの草で目を覚ます。
長い眠りから目を覚ます。
新しい朝が眠り姫にやってくる。
鳥がさえずり、蝶が舞う。
美しい朝がやってくる。

二十九　音楽会への招待状

「おじいちゃんは知っていたの？」

亜夢が席に着くなり、あさぎは聞いた。

「歌ならあるって」

「歌……。どんな歌？」

亜夢は歌を見せた。

あさぎちゃんは字が読めないのかなあ。盛んに首を振っている。

「歌って」

「どんな曲か分からない。歌うのは無理だわ」

「それじゃ読んで」

亜夢は歌を読んだ。

眠り姫が目を覚ます。
目覚めの草で目を覚ます。
長い眠りから目を覚ます。
新しい朝が眠り姫にやってくる。

鳥がさえずり、蝶が舞う。
美しい朝がやってくる。

「ありがとう」
あさぎは教室を出て行った。でも、誰もあさぎを見る者はいない。

もどり橋は後ろ向きに歩けば簡単に渡れた。何でも教えてもらおうと思ったらダメなんだとあさぎは思った。後ろ向きに歩くなんて素晴らしい知恵だ。

あさぎは音の森にさしかかった。みんな音楽会の練習で忙しかった。

音の妖精なら知っているかもしれない。ラッパのような楽器から生まれた妖精にあさぎは聞いた。

「この歌を歌って下さい」

妖精があさぎに言った。

「人間の歌は人間にしか歌えないよ。でも、曲を演奏はできるよ」

不思議な楽器から曲が踊り出た。

♪　♪　♪　♪

あさぎは事情を説明した。

「亜夢ちゃんなら前にここに来たことがあるよ。音楽会の招待状を書いてあげよう」

音の森の音楽会への招待状

亜夢ちゃんへ

目覚めの草の歌を練習しておいてね。曲はあさぎちゃんに教えておきます。

音の妖精より

あさぎは笛で曲を一生懸命練習した。

♪　♪　♪　♪

♪　♪　♪　♪

三十　笛

タマはおばあちゃんの膝の上で気持ちよさそうに眠っていた。タマは音楽会で亜夢ちゃんの歌を聴いていた。これは明日の出来事なんだ。

校舎の裏から笛の音が聞こえてくる。

ぴーぴーぴーひょろ
ぴーひょろ　ぴーひょろ　ぴーひょろ
ぴーひょろ　ぴーひょろ　ぴーひょろ
ぴーひょろ　ぴーひょろ　ぴーひょろ
ぴーひょろ
ぴーぴーぴーひょろ
ぴーぴーぴーひょろ

あさぎが笛を吹きながら踊っている。

笛に合わせて亜夢が歌う。

眠り姫が目を覚ます。
目覚めの草で目を覚ます。
長い眠りから目を覚ます。
新しい朝が眠り姫にやってくる。
鳥がさえずり、蝶が舞う。
美しい朝がやってくる。

「合わないなあ。声は素晴らしいのになあ。亜夢ちゃんってひよっとしたら音痴」
「そんなこと言うならもう歌わない。七海ちゃんにでも頼んだら」
亜夢はぷいと横を向いた。
「ごめんごめん。機嫌を直して。招待状は亜夢ちゃんに来たのだから、七海ちゃんじゃダメなの」
亜夢も気を取り直して歌う。やっとうまく歌えるようになった。亜夢の声は伸びやかで鈴を振るように美しい。七海ちゃんにも負けないかもと、亜夢は思った。
暗くなってきたので亜夢はあさぎと別れ

て夜道を急いで帰った。明日は日曜日だ。
あさぎちゃんが迎えに来ると言った。

三十一　音の森の音楽会

あさぎは昼過ぎにやってきた。
「あさぎちゃんと遊びに行くね」
おばあちゃんには友達の姿が見えなかった。
二人は並んで森の方へ歩いていった。
「門番に招待状を見せれば通してくれるよ」
あさぎは言った。
「門番って？」
「大きなキツネ」
あさぎが答えた。森に着くと、
「亜夢ちゃんはここから。わたしは戻り橋から森へ入るわ」
と、あさぎが言った。一人で行くのが心細かったので、

「一緒に行こう」
と、亜夢は言った。あさぎは首を振って悲しそうな顔をした。
「森に入ればすぐに会えるわ」
あさぎはそう言って駆けだしていった。
森に入ると、音楽が聞こえた。大きなキツネが道をふさいでいた。招待状を見せると、
「楽しんできな、俺はいつも留守番だ」
と、門番は悲しそうに言った。
「ここでも聞こえるように大きな声で歌うわ」
亜夢が言った。
「優しい子だなあ。がんばれよ」
門番は目を細めて言った。
亜夢は音楽の方向に急いだ。
途中であさぎが待っていた。
「行きましょう」
あさぎが言った。
音楽がだんだん近くなる。会場に着いた。

受付で招待状を渡す。受付係は白い猿だった。

「楽しんでね」

猿は言った。

舞台では華やかなマーチが演奏されていた。不思議な楽器から飛び出す音の妖精が舞台いっぱいに飛び回っていた。小さな子供はカスタネットみたいな美しい貝殻をたたいた。タン、タン、タン。老人が吹く大きなまき貝のような楽器。ブォーブォーブォー。美しい女の人が弾く虹色のピアノみたいな楽器。時々ふたが開き、バリトンの歌が飛び出す。

「すごいなあ」

亜夢は歓声を上げた。音楽が終わると、舞台中央にきじみたいな鳥が出てきた。

「今日は素晴らしいゲストをお迎えしています。人間界から来られた、亜夢ちゃんです」

ものすごい拍手だ。亜夢は舞台中央に立

った。客席の後ろの方に美しいキツネが亜夢の方を見ていた。落ち着くように亜夢は大きく息を吸い、歌いはじめた。

眠り姫が目を覚ます。
目覚めの草で目を覚ます。
長い眠りから目を覚ます。
新しい朝が眠り姫にやってくる。
鳥がさえずり、蝶が舞う。
美しい朝がやってくる。

亜夢の美しい歌声は山や野を越え、眠り姫の家に届いた。眠り姫はゆっくりと目を開けた。ヨモギは腰を抜かした。

「姫が目を覚まされた」

三十二　約束

亜夢の歌が終わっても拍手は鳴り止まない。

あさぎははっとした。約束を忘れていた。あさぎは急いで会場を出た。最長老に魚を持って帰る約束だった。いわしを持って帰らなければ私は命を落とす。猫たちは許してくれない。姫は目覚めたのだろうか。後ろ髪を引かれながら、あさぎは必死に走った。

「あさぎちゃんを見ませんでしたか？」

亜夢は受付の猿に聞いた。

「さっき、ものすごいいきおいで駆けていったわ。亜夢さんに私のことを聞かれたら、先に帰ったって言ってねと」

と、猿は言った。

「ありがとう」

亜夢は門番の所に来た。

「よく聞こえたよ。ありがとう」

門番は言った。

亜夢はいつの間にか森の前に立っていた。

その頃あさぎは商店街にいた。魚屋があ

った。人間になる時間も惜しかった。あれがいわしだ。素早くかけより、魚をくわえた。だが、あさぎがくわえたのはいわしではなくてアジだった。お店の人は小さなキツネがアジをくわえて逃げていくのをぽかーんと見ていた。

「キツネだ。キツネだ」

商店街は大騒ぎになった。あさぎは逃げた。約束は守らなくては。

ヨモギはあさぎが帰ってこないのは姫の世話がいやになって逃げたのだと思った。だから姫にはあさぎのことを話さなかった。眠り姫はあさぎのことを知らない。眠りから救ってくれたあさぎのことを知らない。最長老の猫の怒りをかってかみ殺されたなんてもっと知らない。命をかけて姫を守ったのに。

美しい姫のうわさを聞いて、若君が姫を訪れた。二人は結婚して、姫は男、女、男、女、と子供を生み幸せに暮らした。

月曜日にあさぎは学校に来なかった。亜夢のとなりはひっそりとしていた。亜夢は後藤先生に聞いた。

「あさぎちゃんは欠席ですか」

「あさぎさん？」

「転校生のあさぎさん」

「転校生なんていないわ」

亜夢は黙ってしまった。

「亜夢ちゃん、どうしたの？」

先生の顔が前にあった。

「わたし……。多分夢を見たのだと思う」

「そうね、わたしも夢と現実が分からなくなることがあるわ」

後藤先生は亜夢の頭をなでた。後でこっそりと、良太や七海ちゃんに聞いてみても、あさぎちゃんのことは二人も知らなかった。

わたしは夢を見ていたと亜夢は思った。でも、目覚めの草の歌は覚えている。夢なんかじゃない。亜夢は心の中で叫んだ。

三十三　新しい町へ

学校から帰ると、お母さんと新しいお父さんが来ていた。

「生活も落ち着いたし、それに、小さいながら家も買ったし」

お母さんが言った。

「ローンが大変ですが」

新しいお父さんは頭をかいた。

「亜夢の部屋も用意してるのよ」

お母さんが言った。

クリスマスの贈り物も沢山あった。でも、亜夢はうれしくなかった。

「正月に連れて帰りたいの」

お母さんが言った。

「正月はいや」

亜夢が言った。友達にさよならを言えない。

「学校が始まってからの方がいいの？」

お母さんが聞いた。
「うん」
亜夢はうなずいた。やはりお母さんと暮らしたかった。
「そうするか。淋しくなるなあ」
おじいちゃんが言った。
「でもお母さんのそばがいいよ」
おばあちゃんがそう言うと、おばあちゃんの目から涙があふれ出た。
「おばあちゃんごめんなさい」
亜夢が言った。
「かってばかり言ってごめんなさい」
お母さんも泣いた。
「私もいい父親になるようにがんばります」
新しいお父さんが言った。
その夜みんなでクリスマスを祝った。
亜夢は「きよしこの夜」を歌った。

きよしこの夜　星はひかり

すくいの御子は　御母の胸に
ねむりたもう　夢やすく

きよしこの夜　御告(みつげ)受けし
羊飼いらは　御子の御前に
ぬかずきぬ　かしこみて

きよしこの夜　御子の笑みに
めぐみの御代の　朝の光
輝けり　ほがらかに

亜夢の声はりんとした冬の夜空に美しい調べとなって流れた。

三十四　トマト畑

年が明け久しぶりに寒さのゆるんだ日に
「お昼は外で食べましょう」
とおばあちゃんが言った。
「それもいいね。トマト畑も見たいし、畑で

食べよう」

おじいちゃんが言った。

三人は亜夢を真ん中にビニールシートの上に腰を下ろした。霜よけのわらが気持ちいい。おばあちゃんが作ったお弁当がとてもおいしい。おにぎり、卵焼き、ウィンナー、レタス、みんな亜夢が好きなものばかりだった。

「土も春を待っているんだよ亜夢」

おじいちゃんが煙草を吹かしながら言った。

「また帰ってくるね」

亜夢が言った。

「いつでも帰っておいで」

おばあちゃんが言った。

空を見上げると、二三日前の凍るような空ではなく、どこまでも青い空だった。

三十五　閉ざされた森の神話

「亜夢ちゃんは転校します」

後藤先生が言った。亜夢は席を立った。

なにも言えなかった。先生が拍手をした。
「悲しいけれど、みんなで亜夢ちゃんの門出を祝いましょう」
友達も拍手をした。亜夢はお辞儀を繰り返した。
「みんなありがとう」
そう言うと涙がこらえきれずにあふれ出た。後藤先生も泣いた。女の子たちも泣いた。良太は泣きたいのにがまんした。

成人の日にお母さんが迎えに来た。
森の前を通った。結局森には入らなかったのにとてもなつかしい気がした。駅に着くと、良太と七海ちゃんが来ていた。
「手紙を書くね」
亜夢が言った。
「私も」
七海ちゃんが言った。
「俺も」
良太が言った。

新しい町での生活が長くなった今でも時々、亜夢は森のことを思い出す。あの森の中にはなにがあったのだろう？

平成二十一年一月十九日　了